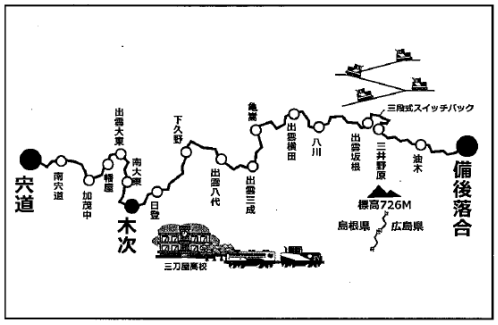
島根県立三刀屋高等学校 掛合分校
校長発『ほんりゅう』 【9月号】令和５年９月２０日

■演劇のチカラ①－記憶のトリガー－

その瞬間、1000 人以上が入った会場のあちこちからすすり泣く声が聞こえました。本校演劇部が国立劇場で上演した『ローカル線に乗って』のフィナーレの瞬間です。『ローカル線に乗って』は、本校演劇部が全国高等学校総合文化祭（全国総文祭「２０２３かごしま総文」）で第２位の成績をおさめ、国立劇場での上演権を獲得した演劇です。



作品紹介

10 時 56 分発の汽車に乗るために女性が一人、木次駅へ駆け込んでくるが、ホームに車両の姿はない。一人たたずむ駅員に時刻を尋ねると「1059」と答える。間に合ったのか間に合わなかったのか、二人の不毛なやりとりの中、来るはずのない謎の列車が到着する。おそるおそる乗り込むと、それは昭和の思い出を乗せた汽車だった－。

過去と現在、現在と未来、ローカル線が問いかける豊かさのあり方。

現代を生きる女子高校生令和さんが、ＪＲ木次線の車内で平成、昭和を生きた人たちと出会い、会話を通じて戦前から終戦直後の木次線沿線の様子を描き「木次線は今後も地域に必要なのか？」「本当の豊かさとは何か？」と問いかけた内容のものです。全国総文祭では、審査員の方から「高校演劇という枠からもう ちょっと超えてしまっている」との評価を受け、地元地域の社会問題に向き合いながら高い演技力で訴えかけた姿に称賛の声が上がりました。本校演劇部を密着取材していただいた NHK 松江放送局が制作した番組の中では「自分の問題として捉えなおそうということがほかの高校生と比べるとひとつ優れていたんじゃないかと思いました。」（審査を担当した演劇評論家の西堂行人さん）「（気持ちを）言葉にすると涙が出ちゃいそうで。すごい感動してて。」（都内在住女性）「高校生が実際に起きている自分たちの線路の存続の問題というものを劇にして伝えるということがすごく心に響くものがあって本当に感動しました。」（四国から来た男性）といった声が紹介されていました。

全国総文祭出場に先立って７月に雲南市で行われた壮行公演には約 500 名の皆様にお越しいただきました。公演後、地元在住の卒業生の方（女性・70 歳代）からお手紙をいただきました。そこには高校卒業後、木次駅から機関車 C56108 号に乗って松江市の学校まで通学したこと、冬になると宍道と加茂の間にある金山峠で車両が止まることが多く、その度に乗客が降りて後ろから押したことなど、木次線の思い出とともにこれまでのご自身の人生の一コマ一コマが、丁寧にしたためてありました。

また、国立劇場での公演後は、東京在住の卒業生の方（男性・50 歳代）から私あてに次のようなメールをいただきました。「昨日、国立劇場で演劇部の公演を観てきました。同級生では私だけだったようですが、東京在住のＯＢさん達と連れ立って行きました。あらすじもさることながら、圧巻のパフォーマンスで、生徒さんたちの芝居に心を揺さぶられました。国立劇場、しかも大トリということで、生徒さんたちはプレッシャーだったかもしれませんが、そんなことを感じさせない伸び伸びとした熱演に、しばらく拍手が鳴りやみませんでした。三刀屋高校の演劇部

が全国区になった瞬間に立ち会うことができとても嬉しい気持ちで帰路につきました。生徒さんたちは今日、帰郷されるそうですが、どうぞ労ってあげてください。」そして、このような激励とともに「木次線で松江や三井野原に行ったり、大東の雲南病院に行ったり、桜土手が通学路だったり、40 年前に故郷から旅立った記憶が重なったり、様々なことが去来する演劇でした。」と思い出を綴っていらっしゃいました。

私自身も、高校を卒業した３月末、都会の大学に旅立つクラスメートを一人また一人と駅で見送った記憶がよみがえってきます。クラスメートは大学に合格して、桜の咲く４月から始まる次のステージに向け意気揚々と旅立っていく。それなのに自分は４月からも志望校に向けての準備をしなくてはならない。笑顔で見送った後の寂しさ…心の中は挫折感でいっぱいでした。私にとって決していい記憶とはいえないですが、それでも記憶に残る青春の１ページであることに変わりはありません。

『ローカル線に乗って』は、この地域で過ごした人たちそれぞれの忘れかけていた記憶を引き出すトリガー（引きがね）になっているのだと思います。世代によって木次線にまつわる思い出は異なっていても、そこには共通して木次線が存在していて、演劇の内容さながらに観客一人一人がこの「ローカル線」にそれぞれの記憶とともに“乗車”していく。木次線とは直接かかわりがなかった観客の方にとっても、ある種の郷愁を引き起こす普遍性をもった作品となっているように感じます。

そして、演劇の内容とともに、実は演劇部の皆さんが熱演しているその姿そのものが、世代を超え地域を超え多くの方の心を揺さぶっているのだとも思います。東京在住の卒業生の方のメールはこう結ばれていました。「帰省するたびに老いて寂れていく故郷に心が痛んでいましたが、若い後輩たちという財産があることに気が付きました。ただただ母校を懐かしむだけでなく、そんな後輩たちを出来るだけ支援していきたいと思っています。」と。